

2012年 和本で見る書物史

## 第3回 書物の歴史（平安時代）

はしぐち こうのすけ  
橋口 侯之介

『和本入門』 pp34-37、『和本への招待』第一章「千年前の『源氏物語』を復元する」参照  
平安時代は自由な工夫があった時代

### 卷子本の呪縛

中国で竹簡以来、紙に文字を書くようになってからも巻いて保存する習慣は続いた。むしろ紙の巻物を華麗に飾って仕立てる方向に進み、日本にも伝わった。奈良時代の書物はすべて卷子本だった。それが「正式な」書物の形とみなされてきた。朝廷の上層部を担う公卿の作法だった。

### 漢文が正式な文章

文字は中国から漢字が伝わった。日本でもすべてを漢字で表現しなければならなかった。それ以来、仮名が使われるようになって、漢文がつねに「正規の」文体だった。仏教の典籍（仏典）も同様である。サンスクリット語で書かれたインドの仏典は中国に渡ってすべて漢字化されて、それが日本に伝わったからだ。この卷子本で漢文体が「規範」だった伝統は、しだいに薄くなっていくが、奈良時代から鎌倉時代、いや室町時代まで続く。

### 仮名文学の誕生

その中で『万葉集』で万葉仮名が使われたように音を漢字にあてて日本語を表現した。それが平安時代は和歌になる。その過程で平仮名が考案された。漢文を補助的に読むために片仮名もできた。

漢字は男文字、平仮名は女文字とされた。しかし、漢文では日本人のコミュニケーションにならない。日常語（口語のような）近い言葉で語るほうが人の生き様や情感を語りやすい。そこから発展して、物語や日記を平仮名で書くようになる。仮名は女文字だったので、男が使うときにはわざわざ紀貫之の『土佐日記』（935年頃成立）の巻頭「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」のように述べているのはそのあらわれである。しかし、女性が書く分には何の決まりも制約もなかった。

先行していた『竹取物語』や『伊勢物語』、『落窪物語』は男の書き手と思われるが（著者不詳）、西暦1000年頃からの随筆の『枕草子』（清少納言）、日記では『紫式部日記』、『和泉式部日記』、『更級日記』、『蜻蛉日記』そして何といても『源氏物語』は女性の書き手によるものである。

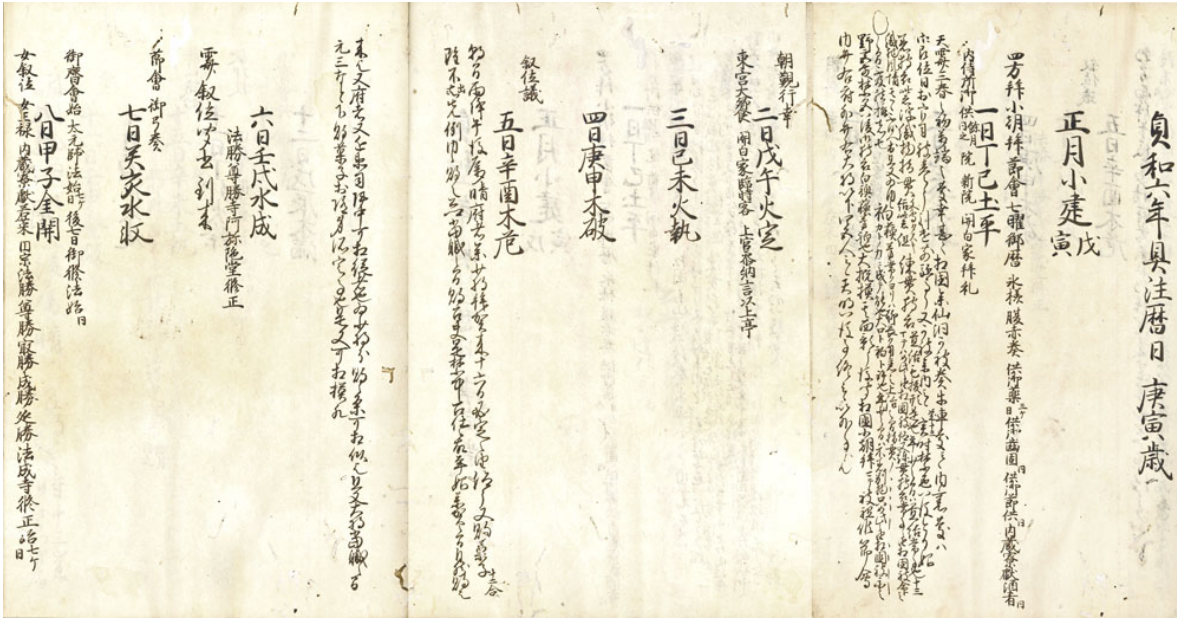
### 公家の日記と女流日記の違い

同じ日記でも男の公家が書いた記録風の日記も多い。『源氏物語』の時代（西暦1000～1010年頃）絶大な権力を握った藤原道長『御堂関白記』などは、歴史の史料としては信頼度が高いとされているが、「おもしろい」ものではない。それに対して、同じ時期に書かれた『紫式部日記』は激しい感情まで表現している。



『紫式部日記絵巻』大塚巧芸社版複製から

公家の日記の例。その日の吉凶などがあらかじめ記されていて、その間に記録を書く



物語や仮名の日記は卷子本にする必要がない

物語や仮名の日記は日常語で自由に書けたので、複雑な人間関係、その間の心理的描写など深い感情が表現でき、時代を超えて読者に訴え続ける力をつけた。

しかも、女文字であることは、漢文ではないので卷子本にする必要がなかった。

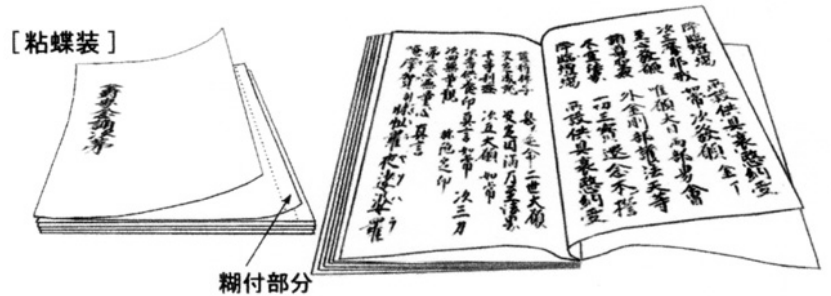
卷子から冊子へ

文字や絵の書かれた紙を料紙(りょうし)という。その料紙を糊で何枚も横につなげたのが卷子本や折本だった。糊で横に貼り合わせるのではなく、一枚ずつめくられるようにして製本箇所(せいほん箇所)にだけ糊を使う綴じ方が工夫された。

料紙を半分に折りたたみ、背中(のどと背の部分)の部分を一枚ずつ糊付けして冊子状にし、表紙を貼り付ける製本の形を粘葉装(でんようそう)といった。

中国ではこれを胡蝶装(こちょうそう)といって、唐代からあり、宋代ではこの形の宋版(そうはん) (宋の時代の印刷物) が主となった。日本での初期の物として確認できるのは空海(くうかい) (と橘逸勢(はやなり)の中国での修行のさいに書き留めておいた(いわばノート)である『三十帖(じゅうさくし) 冊子』が現存する。

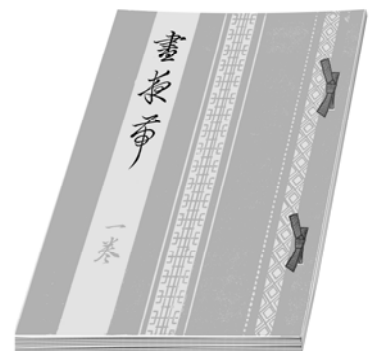
平安時代には盛んに作られたが(例・『北野本日本書紀』複製)、のちには仏教とくに真言宗系の本に多い。



糊のねばるを意味する「粘」の漢音デンと紙を数える単位「葉」の古い音エフで、デンエフというのが、しだいにデツテフになまってでうちょうと読むようになったらしい。本を開くと蝶の羽が開くように見えるので中国では胡蝶装(こちょうそう)といった。

結び綴 大和綴

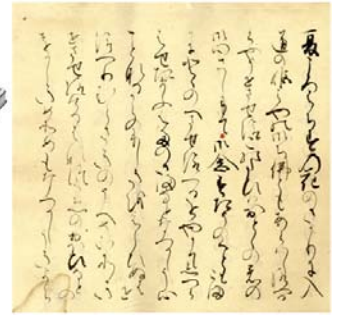
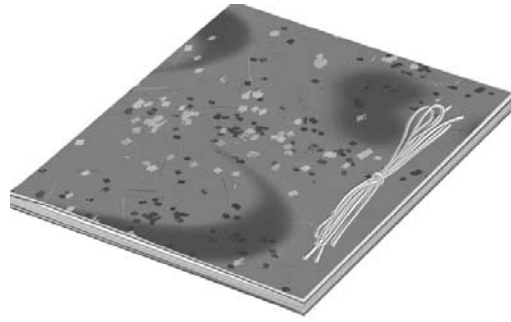
背の部分に糊を使わずに丈夫なひも状の糸を結わえて綴じるものもあった。それを結び綴(むすどじ)という(右図。いまはこれを大和綴という)。糊は虫を寄せ付けて虫害のもとになるので避けたかった。組糸にすると丈夫さでは糊以上であり、紐が切れたら取り換えればよい。





紫式部は宮中で自分の物語を本にして配ることをした。日記によると

「いろいろの『色紙』を選び整えて、物語の本を添えつつ、方々に手紙を書いて配った。その後、綴じ集めたものを整理した」という記述があり、自分たちで製本までおこなっている。粘葉装もできないではないが、ただ糸で結ぶだけでよい結び綴りが向いている。わたしは『源氏物語』の原本の形はこれだと思っている。



## 料紙と色

写経は白紙に書いてはいけないので、キハダや藍で染めた紙に書いた。平安貴族や女性たちは衣服でもお気に入りの色のバリエーションを楽しんだように、染め紙の色の組み合わせを楽しんだ（かさねという）。紙の原料も麻は使わなくなり、楮と雁皮となる。とくに雁皮を材料とした斐紙という紙は光沢があつてきめが細かく、なめらかな紙である。書きやすく、また虫害を受けにくい特長があつた。これにさまざまな技巧を駆使して模様をいれるなどの工夫をした紙もあつた。紫式部の時代も薄い斐紙に「いろいろな色」の染紙が提供された。そこにセンスのよい美しさがあつたので、後世の憧れとなつた。これを『くみやび雅』といつた。

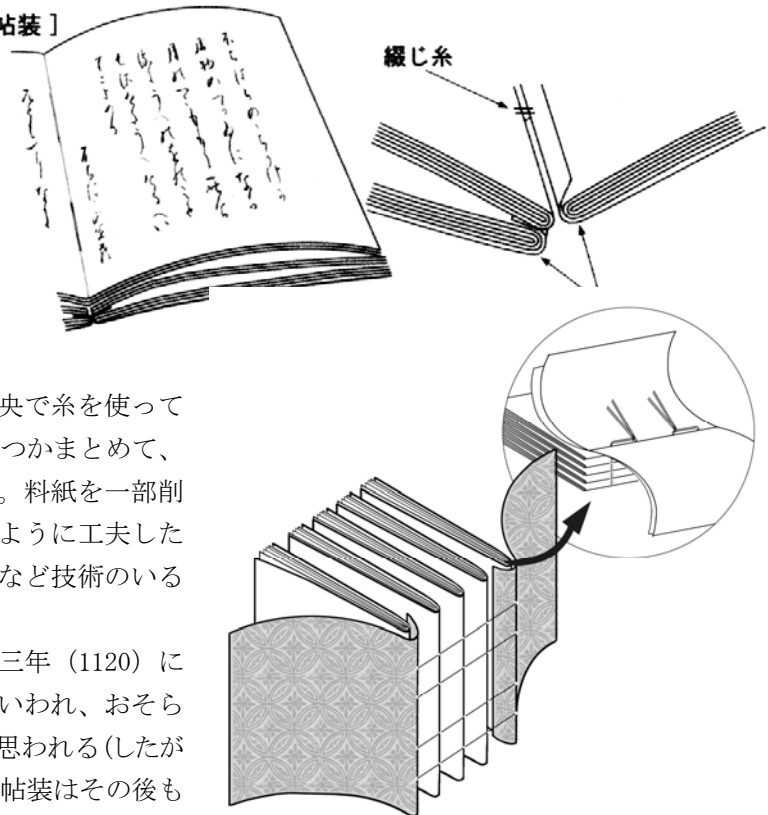
## 列帖装

製本部分を強化するために、糊のかわりに糸でかがる方法のほうが良いが、これを丈夫で見栄えの良い方法にしたものが出現した。これを『れつちようそう列帖装』という。綴葉装ともいうが、近代に入ってつけられた学術用語で、当時のことばではない。料紙を内側に二つ折りにするところまでは粘葉装と同じで、今度はその料紙を数枚重ねて中央で糸を使って綴じる（なかとじ中綴）。その数枚ずつの折をいくつかまとめて、さらに糸でからめて一冊に綴じあげる。料紙を一部削って糸を通し、縫い目部分が見えないように工夫したり、表紙を一折目と最終折に織り込むなど技術のいる製本法である。

現存するものとしては平安末期の元永三年（1120）に書かれたとされる『元永本古今集』といわれ、おそらく12世紀に入ってから実用化されたと思われる（したがって『源氏物語』の時代にはまだない）。列帖装はその後も公家や大名などが歌集や物語の写本をつくる時に用いており、江戸時代まで続いた。

現存するものとしては平安末期の元永三年（1120）に書かれたとされる『元永本古今集』といわれ、おそらく12世紀に入ってから実用化されたと思われる（したがって『源氏物語』の時代にはまだない）。列帖装はその後も公家や大名などが歌集や物語の写本をつくる時に用いており、江戸時代まで続いた。

【列帖装】



次回は中世 和本入門 pp38-42, 47-55